

# 第20回 与謝野晶子短歌文学賞

一般部門 伊藤一彦 選

選者賞

駆け引きも億劫になる花ざかり乞われるままの恋をしている

大阪市東淀川区 鈴木 晴香

花ざかりの季節は確かに心も浮きうきする。したがって恋の駆け引きも億劫。乞われるままに恋をしていると歌っているが、それは照れかくしの表現なのだ。真実は本気の恋をしている歌と私は読む。

秀逸

羽衣を手に入れたるか圏外と君の不在を電話は告げ来

山口県光市 瀬戸内 光

ケイタイに何度電話しても「圏外」だったのだ。いつもは通じるのになぜ？もしかしたら羽衣を手に入れて昇天したのではないかと。上二句の諧謔味も感じさせる発想と表現が面白い。熱愛の恋人であろう。

秀逸

母の忌に見えざる月の裏がわを黄泉と信じて仰ぐ十五夜

金沢市 中村 富代

黄泉のくにをどこに考えるかは人によつて違う。地下あるいは山上など。作者は月の裏がわではないかと信じている。したがって十五夜を仰ぐときは裏がわをありありと想い描き仰ぐのである。美しい母恋いの歌である。

秀逸

草刈機エンジン音は不思議なりかければ草木が敵となりおり

奈良県葛城市 鈴木 保彦

草刈機を用いる前、刈り取る草木に対し特別の思いがあったのではないが、いざエンジン音を響かせて刈り始めると、「草木が敵」に思えてくるという心理。単に草刈りの歌に思えないところが妙味である。

【入選】

密やかにわれの心をくすぐるは君の残り香エレベーターの中

東京都江戸川区 仁戸 久孝

お休処の名前は何と「未完成」好きな言葉につられて入る

群馬県館林市 本川 ミヤ子

あのころと何もかわらぬ金木犀はぐれたふたりをふわり包んで

和歌山市 奥田 麻依子

肥後守出してりんごをむきくれし少年老いて手の温かし

高知県土佐清水市 かどた よしみ

小野田寛郎逝きしと聞きぬ戦争はいまだ終らぬ思ひに聞きぬ

宮城県石巻市 大和 昭彦

楽曲が人間ひとりの一生と感じられればその死まで聴く

仙台市泉区 工藤 吉生

新郎の母なる大役なし終へて妻は戻りぬ癌病棟に

茨城県東海村 櫛田 如堂

風の中鋭きシャッター音のおんしていつの日も君レンズの彼方

兵庫県姫路市 富田 昌代

メモ帳に記されし文字をなぞりては母の指先思い出しおり

福島県伊達市 霜山 紀代

寒に入りどうしてもシチューが欲しくなり日頃にぎらぬ包丁使ふ

大阪府大東市 金村 雄二

流されし後の新築見せんとして甥は連れくる施設の母を

福島県相馬市 石川 房子

何度でも出逢えば君に恋をする17才の 想いのままに

金沢市 春野 菜美

羽化終へし蝶のやうなる身軽さに一輪車に少女は角を曲れり

佐賀市 空閑 敦子

読み終わること寂しくて最終のページに葉差したまま置く

水戸市 木沢 美千子

図書館の「明星」二号に曾祖母の和歌うたをみつけて指でなぞりぬ

静岡市駿河区 高橋 香子

学友の年賀状だけ選り分けて若き日偲ぶ元日の朝

大阪市東淀川区 俵 正市

あと何度恋占いをするだろう口説かれ方も知らないままで

青森市 高橋 圭子

あらためて母の娘と気づかさるわれはわれよと向かう鏡に

大阪府摂津市 頭本 信代

ケータイも心も電源オフにして杉の枝打つ斧響かせて

徳島県阿南市 小畑 定弘

便箋の滲んだインクと同じ色勿忘草は哀しいブルー

さいたま市南区 日比谷 公二

幾ひらも花びらの散らされており子がキャンバスに描く紅バラ

長崎県諫早市 峰 由美子

空に咲く雪の牡丹を髪にのせ気づかぬ君の冬髪飾り

埼玉県ふじみ野市 板原 安秀

農事誌に残せる父の筆跡の遺伝かなはず賀状書く手に

千葉県勝浦市 里見 絹枝

利久えかい慧海晶子を生みし堺フェニックス似合う開かれし町

大阪府富田林市 奥村 和子

推敲はたのしあれこれ入れ替へてひと夜寝かせり糺のやうに

千葉県館山市 高野 伊津子

とかとかとハイヒールの音ついて来る妻の小言の続きのように

兵庫県西宮市 桜田 一夫

きさらぎの雨に混じりて降る雪は余所者よそものように遠慮しながら

福井市 片岡 なおこ

見切り品、と赤き帯にてしめられしにらにもらの意地よあるらむ

東京都世田谷区 足立 訓子

ふるさとを捨てねばならぬあの日から日毎恋しい福島なまり

福島県いわき市 伊藤 保次

二十五年つづきし澄しを白味噌の雑煮にかへて妻の座につく

兵庫県伊丹市 稲本 真由美

仏蘭西の雛罌粟こくりこ詠みし晶子を偲び堺の街にけし餅買いぬ

奈良県生駒市 藤野 薫

どこにでも思えばそこに母はいる気持ちがいいねと新緑の中

仙台市泉区 佐々木 裕子

茶柱がきのうも今朝も立ちまして信じてないが内緒にしよう

静岡県裾野市 高梨 照美

隣り合う膝ひと時の温もりもまた去り行きし東京の人

福岡市早良区 上鶴 稔子

子らの漕ぐぶらんこのおの揺れながら時折横に並ぶことあり

堺市西区 平間 美幸

もうすこし心開けばよかったと今朝積む雪の白さに思う

愛知県稲沢市 柴田 通子

八ッ場ダム湯の宿沈む川原湯の湯掛け祭りも終の年来る

さいたま市大宮区 高橋 和子

降りた恋埋み火のごと消え残るちゃんと振られておけばよかった

東京都葛飾区 飯島 晴美

接吻やキスではなくてキッスと言う父との恋を語りいる母

大阪府吹田市 前田 文乃

吐血して苦しむ母の記憶のみ母の手料理知らぬ吾なり

前橋市 長谷川 陽子

冬の夜は零時にトイレに連れてゆきあとは三時と眠りにつけり

大分市 山崎 美智子

この曲がナツメロソングに変わる頃貴方のそばで笑っていたい

さいたま市見沼区 和氣 智子

両の手にあまるみやげを持たされて安房は菜の花黄の海のなか

神奈川県鎌倉市 遠藤 初恵

熾火に手翳して思う若き日のその恋人の火照る血潮を

札幌市東区 福島 吉郎

たわむれに君にローファー脱がされてリラ香り立つ風のグラインド

札幌市北区 永 つむぎ

厳寒のまばゆく暮れてまだ何も盗み出せない盗賊気分

大阪府和泉市 小野田 裕

ランドセル空色が好きと決めた子は二キロの道を駆け出して行く

島根県川本町 南部 太

朝の間の怒り小言はつつしめと母の口癖われも習いぬ

兵庫県西宮市 竹内 安子

トローチの穴に舌先あそばせて胸の疼きをあいまいにする

奈良県天理市 川北 昭代

情報の漏洩に聴き病院に番号のみの私の存在

和歌山市 山田 則子

三人の孫よりちひさくなる頃にまるい眼鏡の似合ふ気がする

香川県善通寺市 子川 多栄子

形見なる母の指輪は偽物<sup>にせ</sup>とうたがいつつも吾<sup>ゆび</sup>が指に光る

大阪府泉大津市 田中 二三子

やわらかき訛とあらしき訛とが混じる災害支援の現場

宮崎市 本田 皓子

野球帽の裏に〈男〉と書きし子は最後の夏の代打に立てり

川崎市中原区 大平 真理子

髪形を変えたわたしに慣れるまで春の鏡を覗き込みたり

群馬県玉村町 大山 敏子

今まさにタクト振らむとするとき千人の聴衆<sup>ひと</sup>静寂に消ゆ

愛知県岡崎市 浅井 のりこ

冬空の隅をぱちんと切るやうに林檎をひとつ穫り入れにけり

名古屋市昭和区 清水 良郎

蝶になり化粧室より飛び立ちぬ東京駅の朝は忙し

横浜市港南区 高山 克子

ひらくまで美しい夢みていたか日傘が売り場で目を覚ます夏

大阪府岬町 岡野 はるみ

キュロットをはいていた夏 恋をするようにはできていなかった胸

奈良市 山上 秋恵

春の日に母になると言ふ君が厨房にたつる音やはらかし

和歌山県橋本市 湯北 雅子

コンビニは夜の海中水族館若者するりとドアに吞まれる

和歌山県橋本市 浦木 逸子

秋開けて光に透けるナナカマドもうこれ以上紅くなれない

横浜市金沢区 仁藤 和子

会話から介護職らし叶うならこの若きより介護受けたし

大阪府高石市 小林 りつ子

舞ひ落ちる桜を追ひてハンカチに受けし記憶の吉野山なり

宮崎県三股町 奥田 フユ子

神様が見守ってる坂の上覆ひかぶさる藪椿の花

宮崎市 猪俣 文恵

幼き日電車通りを横切りて旅立ちをせし 迷ひ子われは

大分市 後藤 邦江

イベントの一つのような明るさに子ら語りいる我の葬儀を

和歌山県橋本市 赤坂 文代

焼き茄子の湯気に合わせて鯉節わずかな時間舞いを披露す

鹿児島市 岩城 正英

君だけが点す私のフィラメント消す術もなく君は去りゆく

東京都中野区 樋口 盛一

母の好きな蕎麦ぼうろひとつ又ひとつ意識なき母を看取りつつ食む

山口県岩国市 藤本 征子

その仲間どれほどいるか知らないで小手毬の芽がいつせいに吹く

宮崎市 増田 満美子

制服のサージの胸に晶子の本抱えし日々よみがえりくる

相模原市中央区 小林 宣子

伊勢土産の赤福餅は第一級胃の全摘の夫といただく

千葉県習志野市 藤野 宏子

縦縞の君のシャツ置く泡の中三十年が虹のごと見ゆ

福島県相馬市 佐藤 祐子

まことの身知られて去りし夕鶴の部屋のようなり夜のローソン

京都市左京区 福西 直美

少年の引き寄せる鮎容赦なく水面を穿ち沈黙破る

兵庫県明石市 築山 道子

このひとはこんな顔して逝くのかと昼寝する君まもりてわれは

群馬県みどり市 芝崎 好子

妻の手はいつ見るときも細かりきそをもてひたすら人を救ひぬ

東京都品川区 松見 敏夫